# 生徒を信じ、焦らず気付きを待つ中で、生徒と教師が共に成長する

## 栃木県・私立文星芸術大学附属高校　英進科

### 書くことを通して生徒が自分と向き合う

**――文星芸術大学附属高校の英進科は、2001年度に設置された。2期生が受験した05年度入試で筑波大、東京外国語大など国公立大に10人合格、早稲田大や上智大などの難関大を含む私立大に延べ47人合格という実績を早くも上げることに成功。全国の注目を集めた。5期生が挑んだ08年度入試で初めて東京大、京都大現役合格者が出るなど、その躍進の背景には、自ら学ぶ意欲を引き出す体系的な進路学習がある。**

**牧島**　2期生の小川くんの頃から今も変わらず、英進科の進路指導のモットーは「進路指導は生き方指導」です。当時から、自己理解や職業・学問研究、大学研究から成る3年間を通した体系的な進路学習を「総合的な学習の時間」に行い（P.16図1）、君たちにも「将来を展望しながら、今自分は何をなすべきかを考える」ことを求めてきました。それは、自分の適性や将来の展望が見えれば高校生活の課題もおのずと明らかになり、目標や夢を持つことで主体的な学習が可能になると考えているからです。「進路観」の確立と共に大切にしているのが、書くことや考えることを通じて自分と向き合い、コミュニケーション能力を高めることです。6期生の磯崎くんが入学した06年度には、この理念を具現化した400字作文、ディベートもほぼ今と同じような内容で展開されるようになりました。ただ分量については、400字作文は3年間で書く回数は2倍に、ディベートの時間も1年生の3学期だけだったのが、4年前からは2年次の3学期も充てるようになり、倍増しています。

**磯崎**　社会問題や学問、大学などさまざまなテーマで、400字作文をたくさん書いたことはよく覚えています。牧島先生はもちろん、他の先生方も口をそろえて「書くことは考えることだ」「書けないとしたらそれは十分に考えていないからだ」と

**栃木県・私立文星芸術大学附属高校　英進科**

3年間の進路学習を通じて、将来を展望しながら今何をすべきかを考えさせる進路指導を展開。放課後の自主学習、400字作文やディベートなどとの相乗効果により、コミュニケーション能力などを含めた人間性の向上を図っている。

◎1911（明治44）年設立。全日制／英進科の他に普通科・総合ビジネス科／男子。1学年約340名（そのうち英進科60名）。13年度入試では、国公立大は山形大、宇都宮大、埼玉大、東京外国語大、東京学芸大などに18人が合格。私立大は上智大、東京理科大、法政大、明治大、早稲田大などに延べ131人が合格（英進科・現浪計）

〒320-0865　栃木県宇都宮市睦町1-4／電話028-636-8585

http://www.bunsei-art.ac.jp/

▶▶▶2008年2月号「指導変革の軌跡」で同校の取り組みを紹介しています。

私たちに話してくださいました。正直、当時はそうした言葉の意味をきちんと理解してはいなかったかもしれません。ただ、「先生方がそうおっしゃるなら」という気持ちはありましたし、大学生になった先輩方が高校生活を振り返った文集「大学の窓から」（図2）でも、ほとんどの方が「400字作文に取り組んでよかった」と書いていたので、僕も「先生と先輩を信じよう」と思いました。添削も評価もなく、書くペースも生徒個々に任されていましたが、クラス全員、怠ける者もなく、当たり前のように取り組んでいました。

**図1　英進科の進路シラバス（1年生1学期から抜粋）**

| 実施月 | テーマ | 学習内容 | 使用教材 | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| 4月 | 学習姿勢をチェックしよう<br>B 進路探しを始めよう | 学習の心得 | 【資料】学習の心得3か条 | 学習の心構えを育成する |
| | | 進路学習のねらい<br>進路学習教材について<br>進路学習計画について | 【資料1】進路学習をはじめるにあたって | 進路学習の流れを把握する |
| 5月 | C 自分のことをもっと知ろう | STEP 1 進路意識をチェックしてみよう | ノート B-1～3<br>スタートムック | 進路意識をチェックする<br>ムックP8～9を読む<br>※チェックをもとに「今後なすべき課題」を400字にまとめる |
| | | STEP1 適性・関心チェックにトライ! | ノート C-1～5<br>C-6～7 | 適性・関心をチェックする<br>ノートC-6～7を読む<br>※チェックをもとに「感想や新しく気づいたこと」を400字にまとめる |
| | 受験体験記を読もう | 受験体験記の感想文を書く | 受験体験記 | 事前に受験体験記を読み、感想文を400字にまとめる |
| | E 仕事研究を | STEP 2 仕事への視 | | ムック P2～11を読む |

400字作文やディベートはシラバスにも明記されている

進路学習のテーマ・内容・教材を1年生1学期から3年生1学期まで月ごとに詳説する。
使用教材はベネッセの「進路サポート」
＊学校資料を基に編集部で作成。全文はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトに掲載
http://berd.benesse.jp → HOME ＞教育情報＞高校向け

## 評価を焦らず本人の気付きを待つ

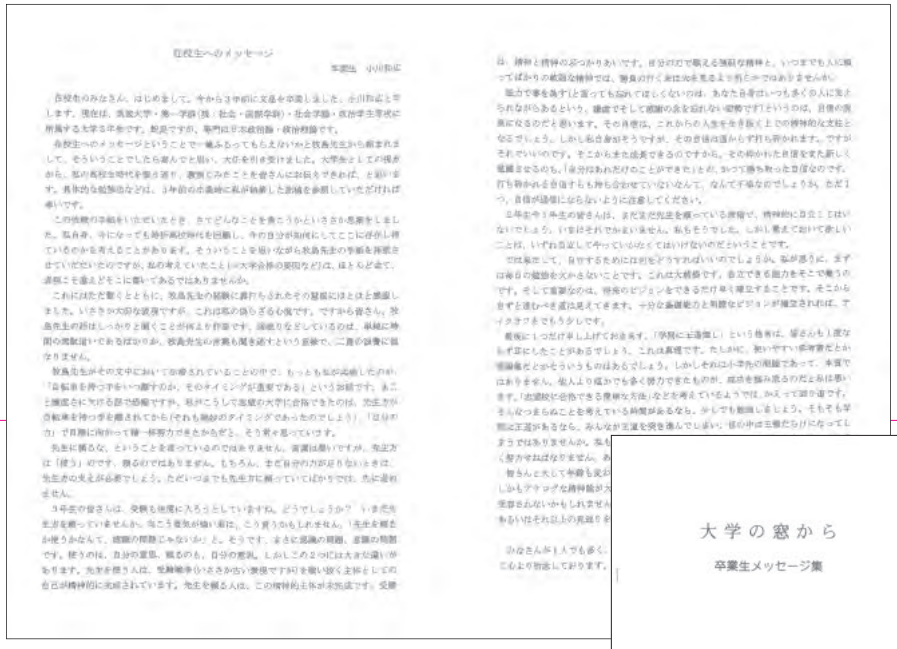
**染野**　提出された作文には、目を通したことを示すサインはしますが、小論文対策ではないので点数を付けたり、書き方を指導したりは今もしていません。ただ、作文から生徒が考えていることはよく分かるので、清掃などの時間に声を掛け、話をすることはよくあります。

**竹内**　他校の先生から「評価しなくてもよいのですか？」「評価しないと生徒が書かなくなりませんか？」と実はよく聞かれるんです。でも、英進科ではもうそれが当たり前になっていますよね。「テストがなくても自主的に勉強する」ことと同じで、評価されなくても、それが意味のあることだと分かっているから、皆、書いているのだと私は思っています。

**小川**　きっと後輩たちは、評価はされないけれど、先生が読んでくれているということに安心感を覚えているはずです。だから、高校生の感性を生かして、テーマに対して思ったことを自由に書けるのでしょう。

**牧島**　キャリア教育には、職業や学問、大学について知る、いわば外的な刺激だけでなく、内的な刺激が必要です。書くことは考えることだからこそ、書くことを通して君たちは

**図2　卒業生のメッセージ集「大学の窓から」**




英進科を卒業した大学生が、母校での日々を振り返り、後輩にメッセージを送る「大学の窓から」には、400字作文やディベートによって得られた気付きがそれぞれの言葉でつづられている。教師、そして先輩の言葉があって、生徒たちも成果を急ぐことなく、自分を見つめる活動に没頭することが出来る
＊学校資料をそのまま掲載

文星芸術大学附属高校　英進科
**牧島勝利**
まきしま・かつとし
教職歴51年。同校に赴任して13年目。進学統括参与。

文星芸術大学附属高校　英進科
**竹内昭夫**
たけうち・あきお
教職歴32年。同校に赴任して14年目。英進科科長。

文星芸術大学附属高校　英進科
**染野幸弘**
そめの・ゆきひろ
教職歴17年。同校に赴任して18年目。英進科次長。

**文星芸術大学附属高校　英進科　卒業生**

**磯崎　要**
いそざき・かなめ
凸版印刷株式会社（社会人1年目）

**小川和広**
おがわ・かずひろ
株式会社日本経済新聞社（社会人5年目）

内的な刺激を受けていたのです。そして内的な刺激が「なぜ勉強するのか」という疑問を解消してくれた時、どの生徒も心の詰まりが取れたように主体的に学び始め、学力も大きく伸びるのです。君たちだってそうだったはずですよ。

**磯崎**　先生方はよく「ため込んだ知識が線になってつながる時が来る」とおっしゃっていましたよね。実際に私は、2年生の秋頃から、勉強が楽しいと思えるようになり、成績も上がり始めたんです。「先生方がおっしゃっていたことは、こういうことだったんだ！」と思いました。

**牧島**　キャリア教育は、本人の気付きを待つ教育です。自分で気付いた者は強いが、指示された通りにしか動かない者は弱い。だから、考える場を与え、君たちが気付くのを私たちは待ったのです。とはいえ、私たちも最初から「待つ」ことが出来ていたわけではありません。英進科創設当初は、放課後補習など、教師が手を掛ける指導に力を入れていました。小川くんはきっと記憶にあるはずです。でも目の前の生徒を見ると、明らかに知識の消化不良を起こしている。だから思い切って、教師が主導する補習はやめて、生徒が自分で必要な学習を考えて、自分のペースで学べる自主学習をする時間に切り替えたのです。当然「自主学習では生徒は怠けてしまう」という反対の声もありましたが、「自主学習の習慣がないからこそ、自主学習が出来るように育てよう」と考えたのです。私たち教師が我慢し、生徒を信頼しようと決断したことで、今は物音1つしないほど静かに自主学習が進められています。

## 自分自身の意外な一面に気付く場をつくる

**——英進科のキャリア教育で見逃せないもう1つの軸が、1・2年次の3学期のディベート活動だ。今では、日々の授業や教師との対話など、さまざまな知的経験を生かしながら、生徒が一生懸命に取り組む活動になった。だが、生徒はディベートに熱くなりながらも、そこでの学びはディベートのスキルにとどまるものではないと理解している。**

**小川**　ディベートの時に、先生から「相手を打ち負かす方法を覚えることが目的ではなく、異なる意見を聞きながら、自分の考えを深め、新しい考えをつくっていくすべを学ぶことに意味がある」と教えていただきました。ディベートを経験したおかげで、論理的なものの考え方、説明する力が養われたと思いますが、こうした力は新聞記者という仕事に限らず、社会で必要だと実感しています。論理的な思考力・表現力は、「こうすればよい」と説明されるだけで身に付くものではありませんから、高校時代の実体験はとても価値のあるものだと思います。

**磯崎**　私は、ディベートの事前準備で、グループでテーマについて調べた時に苦労したことをよく覚えています。同じ資料を前にしても、どう解釈するかは人それぞれ違います。他者と作業をすることの大変さを、ディベート活動で経験することが出来ました。

**染野**　ディベートは400字作文（図3）同様、「この生徒は、こんな一面を持っているんだ」と、授業中とは違う顔を知るチャンスなんです。生徒自身にとっても、自分を深く知る機会になっているはずです。

**竹内**　400字作文やディベートを続け、生徒が自分の内面を見つめる中で、「何かに気付く」生徒が必ず出てくるんです。でも、いつ、どのように気付くかは生徒によってさまざまで、こちらの思う通りにはいきません。また、何かに気が付いていることは分かるけれども、だからといって教師が声を掛けるべきか、あるいはまだあえて声を掛けないで見守るべきか、そこはすごく難しいところなんです。

**牧島**　ディベートは準備も大変で、しかも最初のうちは不慣れですから、内容も深まりにくく、活発な議論になりません。しかし、生徒がやり方のコツをつかむと、見違えるように盛り上がるんです。そこまでいけば生徒たちも「またやりたい」と言い始めます。つまり、ディベートという活動でも、私たち教師が成果を焦らないことが重要なのです。

**図3　400字作文**

2年　組　番 氏名

テーマ：今後なすべき課題

改めて自分の高校生活を振り返ってみると、生活面での怠の緩みが、学習面にも影響を与えていることが分かった。私は先を見ない癖がある。大学受験があと1年もないのに大丈夫だと言い訳をつけて全然焦っていないというのもこれに当てはまる。先を見ない癖は、自分を現実からわざと引き離し、逃避状態にさせるのだ。それにより、勉強への欲求を失い、忘れ物をしたり授業で集中が切れたりすることが多くなる。今は一年生の時ほどではないが、時々忘れ物をしてしまうことがあるので油断は禁物だ。先を見る癖を意識して習慣づけるのは無理だと思うが、次の日の日程の確認や、授業に向けての予習はできるだろう。それに、毎日書いて提出している自習学習計画表も忘れてはならない。これは、勉強した後に書くのではなく、勉強する前に書くのが重要だ。日々の何かが来年につながると よく聞くので、毎日勉強を怠らずに精進していきたい。

20×20

生徒が自分の心をさらけ出せるように、他の生徒にも紹介したい場合は、必ず本人の承諾を得た上で行う
＊学校資料をそのまま掲載

## 言葉は違っても先生方が同じことをおっしゃる。だから信じようと思いました

凸版印刷　磯崎　要

### すぐには役立たないとしても大切なものがある

**小川**　牧島先生の「成果を焦らない」という言葉は、今思うと、英進科のキャリア教育のキーワードだったような気がします。400字作文も目先の小論文対策ではなく、生き方指導という先を見据えた教育に位置付けていらっしゃいますよね。私は教育の専門家ではありませんが、「すぐに役に立つようなことは、すぐに役に立たなくなる」と思うのです。そして、キャリア教育は、「すぐには役に立たないかもしれないけれど、後々まで役に立つもの」を身に付ける営みなのではないでしょうか。少なくとも英進科のキャリア教育はそうだったと思うのです。

**磯崎**　大学でもキャリア教育は行われますが、それはエントリーシートの書き方など、「就職」をゴールに据えた対策や指導になっています。高校時代に必要なキャリア教育は、英進科のキャリア教育のように先を見据えたもの、もっと言えば、ゴールがない教育だと思います。

**小川**　キャリア教育とは少し違うかもしれませんが、牧島先生の「入試を理由に勉強する教科を絞るのは、自分の可能性を狭めることになるし、必ずしも成績向上に結び付かない」という言葉が強く印象に残っています。当時からマスコミを目指していた私は、幅広い教養が必要だと考えましたし、「人生にとってマイナス」とまでおっしゃった牧島先生の言葉を信じて、3年生の秋までは、入試で課されない科目も予習復習を欠かしませんでした。今、新聞記者として各界のトップの方とさまざまなテーマでお話しする中で、先生の言葉の正しさを実感しています。

**竹内**　牧島先生の「全教科主義」には、当初私には「本当にそれでよいのか」と疑う気持ちもあったんです。でも、小川くんのように最後まで科目を絞らない生徒が素晴らしい結果

## いつか役に立つ教育の大切さは社会の第一線で身を持って理解しています

日本経済新聞社　小川和広

を出すことが分かると、私も生徒に「科目を絞ることは必ずしもプラスにならない」と本心から言えるようになりました。教師が本気で信じないと生徒には伝わらないということに気が付いたのは、教師としての私自身の成長です。

**染野**　400字作文でも、私たち教師が生徒を信じることが強く求められています。私も最初のうちは、なかなか書いてこない生徒に対して「怠けているのでは?」と疑ったことがあります。でも、それが次第に「怠けている生徒」と「考えていて書けない生徒」の違いが見えるようになりました。「この生徒はきっと書いてくる」と信頼して待つようになると、書くのが苦手な生徒に対する声の掛け方が明らかに変わったことが自分でも分かりました。これも教師としての成長なんでしょうね。

### 学力向上と人間性の向上は不可分のもの

**――社会で活躍する磯崎さん、小川さんは、高校におけるキャリア教育に何を期待しているのだろうか。**

**磯崎**　私は2年生の秋に、一気に勉強が楽しくなりましたが、そこに至るまでは、勉強をつらいと思うこともよくありました。高校生はとても多感で、もろい部分をたくさん抱えています。私は両親の理解と支えがあって、苦しい時期を乗り越えられました。大学合格にとどまらない将来の目標の考え方や、そのための勉強の意義、高校で行われているキャリア教育の意図が、保護者にしっかりと伝わることが大切だと思います。保護者が成績に一喜一憂したり、目先の大学入試にとらわれたりするのはある意味当然でしょうから。

**竹内**　確かに、生活面や学習面で問題を抱えている生徒と話していくと、その原因が家庭にあることはよくあることです。その意味でも、保護者を巻き込んだキャリア教育というのは大切な視点ですね。

**小川**　高校と違って、大学はマス教育、専門教育の場です。結果を焦らない、人間性を高める教育が丁寧に行える場は高校が最後だと思います。だからこそ、すぐに役立つ教育だけではなく、いつか役に立つ教育を大切にして、社会の変化に柔軟に対応できるような素地を後輩につくっていただきたいと思います。

**牧島**　君たちが大学、そして社会で、さまざまな経験をし、そこからいろいろな教養や考え方を身に付けてきたことはよく分かります。今日の2人の姿を見ても、「学力向上と人間性の向上は不可分」だと改めて実感しました。そして、それは高校時代に培った素地があったからこそ、実現できたことなのだと信じています。高校時代だからつくることが出来る素地を、これからも大切にしていきたいと思います。

### 編集部の気付き

英進科が短期間で体系的なキャリア教育の枠組みを確立できたのは、「総合的な学習の時間」を牧島先生と担任のTT（チーム・ティーチング）で行うなど、英進科の先生方の組織力があってのことだろう。「ベテランの先生の指導ノウハウを更に継承し、教師一人ひとりが強く自立することが必要」という染野先生の決意は、成果を焦らないからこそ重要なものだ。